

各関係機関長 様

熊本県病害虫防除所長

病害虫発生予察特殊報について（送付）
このことについて、発生予察特殊報第3号を公表しましたので送付します。

特 殊 報

令和4年度（2022年度）発生予察特殊報第3号

令和5年（2023年）1月23日
熊本県病害虫防除所長

- 1 病害虫名 ネギハモグリバエB系統
- 2 学 名 *Liriomyza chinensis* Kato
- 3 発生作物 ネギ

4 発生確認の経過

令和4年（2022年）10月、県内のネギ栽培圃場で、ハモグリバエ類の寄生と、激しい食害による葉の白化症状が確認された。被害様相が従来のネギハモグリバエ（以下、A系統）のものと異なっており、他都府県で発生が認められているネギハモグリバエB系統が疑われた。そのため、国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構野菜花き研究部門に遺伝子解析による同定を依頼した結果、ネギハモグリバエB系統であることが判明した。

注）系統とは、分類上は同一種に属しているが、種の範囲内で生物的な性質が異なる集団。

5 国内外の発生状況

国外での発生状況の詳細は不明であるが、同じ遺伝子配列のネギハモグリバエが中国から報告されている。

国内では、平成28年に京都府で初めて確認され、これまでに36都府県から特殊報が発表されている。九州では、福岡県、佐賀県、長崎県、大分県及び鹿児島県で確認されている。

6 形態及び生態等の特徴

（1）形態

成虫の体長は2～3mmで、胸部と腹部は黒く、その他の部分は淡黄色である。幼虫はうじ虫状で、成長すると体長3～4mmに達する。蛹は体長約3mmで褐色、俵状である（図1）。形態によるA系統とB系統の識別は困難である。

(2) 生態

成虫が葉の組織内に産卵し、ふ化した幼虫は葉の内部に潜り込んで葉肉を食害する。幼虫は成長すると葉から脱出し、地表面または土中で蛹になる。

(3) 被害

B系統は、A系統と同様に幼虫が葉に潜り込んで葉肉を食害し、不規則な白線状の食害痕を形成する。A系統に比べて1葉当たりの寄生虫数が多く、集中的に加害するため、食害が進展すると食害痕同士が合わさり、葉が白化症状を呈するなど、A系統より激しい被害となる(図2)。

7 防除対策

(1) 両系統は、形態での識別は困難であるため、ハモグリバエ類の被害を認めたら、ネギハモグリバエまたはハモグリバエ類に登録のある薬剤による発生初期の防除を徹底する。なお、薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統薬剤は連用しない。

(2) 被害葉及び収穫残さは本虫の発生源となるので、圃場から持ち出し適切に処分する。



図1 ネギハモグリバエの形態



図2 ネギハモグリバエB系統によるネギ葉の食害

熊本県病害虫防除所
(熊本県農業研究センター 生産環境研究所内)
担当：福岡、中井
TEL 096-248-6490 FAX 096-248-6493